

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25870956

研究課題名(和文) 利他的行動場面における若者からの反応が高齢者の心理的発達と行動に与える影響

研究課題名(英文) Young people's reactions change elderly people's generativity and altruistic behavior.

研究代表者

田淵 恵 (TABUCHI, Megumi)

関西学院大学・文学研究科・博士研究員

研究者番号：70631977

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高齢世代が自らの経験や知恵を、次世代が活かせるよう継承する利他的行動場面において、受け手である若者の反応が高齢者の世代性(Generativity)変化にどのような影響を与えるのかについて、明らかにすることであった。高齢者48名(男性)を対象に、知恵の内容×若者の反応を操作した実験を行った結果、高齢者が失敗経験から得られた知恵の“語り”を行った群のみ、高齢者の世代性に対する若者の反応の影響が認められた。本研究により、高齢者が失敗経験から得られた知恵を継承する利他的行動場面において、若者からの反応や態度が高齢者に与える影響の大きさを、実験的に明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the effects of the contents of wisdoms and reactions of young generations on generativity and narratives of the elderly in passing their wisdoms toward young generations. Participants were 48 old Male adults. They were assigned to the “wisdoms from experiences of failure” condition or the “wisdoms from experiences of success” condition. The recipients responded to the participants in either positive or neutral way. Results showed that only in “wisdoms from experiences of failure” condition, generativity was promoted when the young recipients responded in a positive manner and decreased when the young recipients responded in a neutral manner. The effect of reactions of young generations when the elderly would make use of their negative experiences for the youth was discussed.

研究分野：高齢者心理学

キーワード：世代性(generativity) 利他的行動 高齢者 知恵 世代間相互作用

1. 研究開始当初の背景

高齢世代が自らの経験、特に過去のネガティブな失敗経験から得られた知恵を、次世代が活かせるよう継承する場面において、受け手である若者の反応は高齢者の心理的变化にどのような影響を与えるのだろうか。本研究では、知恵の継承場面における世代間相互作用の影響を、実験的手法を用いて明らかにした。

先行世代が経験から得られた知恵を次世代に伝え、次世代がそれを活かすことは、社会が発展するために重要である。特に、先行世代が自分の失敗経験のような過去のネガティブな経験から得られた知恵を次世代に継承することで、次世代は先行世代と同じ過ちを犯すリスクを回避して生き抜くことができる。こうした次世代にとってネガティブな経験を回避させる行動は、“世代間緩衝 (intergenerational buffers)” (Kotre & Kotre, 1998) と呼ばれ、長い人生においてポジティブ・ネガティブ両方の豊かな経験を有する高齢者にこそ可能な行動であるとされる。

高齢者の次世代に対する知恵の継承行動は、行動の送り手である高齢者と、受け手である次世代の若者との間で良好な相互作用が実現できれば、高齢者の心理的発達にとってポジティブな影響があるとされてきた。例えば Cheng (2009) や Tabuchi, Nakagawa, Miura, & Gondo (2015) は、高齢者が経験から得られた知恵を継承した際に、若者に“受け入れられた”“感謝された”と知覚できるポジティブなフィードバックがあれば、“世代性 (Generativity) (Erikson, 1950)” (次世代を教え導くことへの関心 (McAdams & Aubin, 1992)) という中高年期以降に重要な心理発達を促進することを報告している。また、知恵の継承場面における世代間相互作用の短期的影響を検証した田淵・三浦 (2014) は、高齢者が知恵を継承する場面において、受け手の世代と反応を操作した実験を行い、若者が高齢者

の知恵の継承行動に対してポジティブに反応し、高齢者自身が相手から“感謝された”と感じた場合にのみ、高齢者の世代性が向上することを明らかにしている。

一方、知恵の受け手である若者は、将来起こり得るリスクを回避するための知恵として先行世代すなわち高齢者の失敗経験を活かしたいと考えていることが報告されている (田淵・上有谷・成田・三浦, 2014)。上述したように、高齢者の知恵の継承に対して若者がポジティブに反応を返すことが、高齢者の心理発達に重要であることが報告されているが、実際の日常生活場面において若者が高齢者に対して必ずしもそうできるわけではない。若者から高齢者が“感謝された”と感じることのできる反応を引き出すためには、若者が“感謝できる”知恵を継承する必要がある。そこで田淵ら (2014) は、高齢者のどのような知恵に対して若者が感謝を抱くのかを実験的に検討し、若者は高齢者の成功経験から得られた知恵よりも、失敗経験から得られた知恵に対してより感謝を抱いていることを明らかにした。このことから、高齢者が失敗経験から得られた知恵を若者に積極的に継承し、若者がそれをポジティブに受け入れることが、世代間の知恵の継承が高齢者と若者の双方にとってポジティブな影響をもたらすものとなるための一つの方法であるといえる。

失敗経験から得られた知恵を次世代へ継承するという行動は、高齢者が自らのネガティブな過去を想起して次世代に開示しなければならず、高齢者自身が心理的リスクを負う可能性も高い。そのため、相手との相互作用のあり方がより重要な意味をもつ。小澤 (2013) は、次世代が同じ過ちを繰り返さないためにネガティブな過去を語るという行動が、高齢者にとってポジティブな影響と同時に、過去の再体験というネガティブな影響があることを報告している。高齢者と若者双方

にとってポジティブな影響のある知恵の継承を世代間で実現するためには、若者が求める失敗経験からの知恵を継承する行為が、世代間相互作用を通して高齢者の心理的变化にどのような影響をもたらすのかを明確にする必要がある。

2. 研究の目的

そこで本研究では、若者の反応が高齢者の心理的变化に及ぼす影響の、“語り”内容による差異に関する仮説を設定した。若者からのポジティブな反応が高齢者の世代性向上に影響を与えることを明らかにした田淵・三浦(2014)では、高齢者がどのような経験から得られた知恵を語るかが統制されていなかったため、若者の反応が高齢者の世代性に及ぼす影響の“語り”内容による差異を検討できなかった。そこで本研究では、高齢者の知恵が、過去の失敗経験と成功経験のいずれから得られたものであるかを切り分ける。そして、高齢者自らのネガティブな過去を開示することが求められる、失敗経験から得られた知恵を継承する場面では、受け手の若者がポジティブに反応した場合は世代性が向上し、ポジティブに反応しなかった場合は世代性が低下するという仮説を設定した。

3. 研究の方法

実験参加者

実験参加者は63歳から77歳の中老年男性48名(平均年齢68.12±3.78歳)であった。

実験デザイン

高齢者の知恵の内容(2水準;(a)成功経験から得られた知恵 (b)失敗経験から得られた知恵)と、受け手の若者の反応(2水準;(a)ポジティブ (b)ニュートラル)の2条件を操作し(参加者間)、世代性得点(2水準;(a)継承前 (b)継承後)(参加者内)を測定する3要因の混合デザインであった。

実験課題

高齢者が過去の経験とそこから得た知恵について教えるという語り場面を設定した。実験参加者には“若い頃から今までの成功経験(あるいは失敗経験)から得た知恵で、のちの人生に役に立ったと感じることを、教えてください”と教示し、実験参加前にあらかじめ語りの内容について各自で整理してくるよう伝えた。語りはおよそ20分間とし、必要な場合は各自が持参したメモやアルバム等を参考にしながら語りを行うよう教示した。

実験操作

語りの受け手は、あらかじめ訓練された実験協力者(演劇サークルに所属する学部学生3名:18-22歳)が行った。性別の影響を統制するため、実験協力者は実験参加者と同じ男性とした。実験協力者は、実験者が作成した反応マニュアルにより、ポジティブ反応およびニュートラル反応の訓練を行った。まず、実験者が反応マニュアルに沿って語り中の反応を実演し、次に実験協力者同士で実験協力者・参加者の役割を交代しながら反応の練習を行った。ポジティブ反応は、相手の会話内容への同意、会話のうながしといった言語的・近言語的側面と、会話の内容に応じた視線行動(ポジティブな語り内容の場合は視線を合わせ、ネガティブな内容の場合は視線を逸らす)、姿勢(身を乗り出す)、ジェスチャー(相手の語りに合わせてうなづく)、表情変化(ポジティブな語り内容の場合は笑顔を用いる)といった非言語的側面の両方で行った。ニュートラル反応では、ポジティブ反応に比べ、言語的・非言語的側面における行動を抑制した。

測定

世代性 短縮版 Generativity 尺度(田淵・中川・権藤・小森, 2012)に回答を求めた。この尺度は5項目から成る1因子構造であり、LGS(Loyola Generativity Scale: McAdams & Aubin, 1992)の日本語版(丸島, 2009)、次世代

への利他的行動，社会的活動，主観的幸福感との関連により妥当性が示されている尺度である。回答はそれぞれ“1.全く当てはまらない”から“5.非常に当てはまる”までの5件法で求めた。信頼性係数は， $\alpha=.71$ であった。

実験手続き

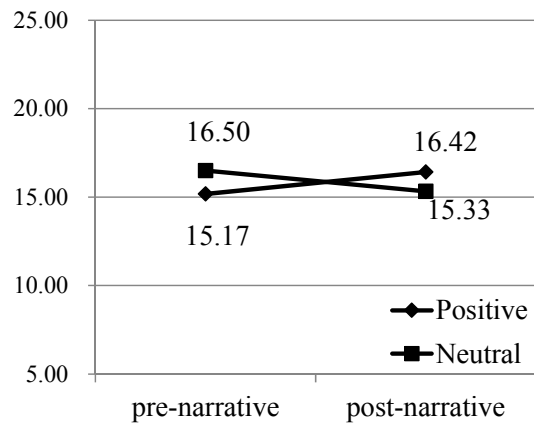
実験参加者は，知恵の内容×受け手の反応の4水準のうちいずれか1つにランダムに割り当てられた。実験日当日の1週間から10日前までに実験説明会が開催され，実験参加者は知恵の語りの内容についての説明を受けた後，調査票（基本属性(年齢，教育年数，主観的健康感)，世代性，日常生活場面における次世代への行動を問うもの）を配布された。実験参加者は調査票に各自回答し，実験日に持参した。実験室来室時は，実験者による説明と，書面による実験参加への同意確認の後，実験参加者が実験協力者に対して約20分間の語りを行った。語り終了後，世代性に関する質問紙調査への回答を行った。実験協力者は語り終了直後に，一時退席した。質問紙への回答後，実験者が実験参加者と対面に着座し，約5分間，語りの感想等に関する面接を行った。その後，実験協力者が再度入室し，実験者によるデブリーフィングを行った。

4. 研究成果

知恵の内容および相手の反応が，世代性変化に及ぼす影響

失敗経験から得られた知恵を継承する場面では，若者がポジティブに反応した場合に世代性が向上し，ニュートラル反応の場合は世代性が低下するという仮説を検証するため，知恵の内容×若者の反応×知恵の“語り”前後の世代性得点の3要因分散分析を行った。その結果，2次の交互作用が有意となり($F(1, 44)=6.37, p<.05, \eta^2=.13$)，失敗経験からの知恵の“語り”の場合にのみ，若者のポジティブな反応によって有意に世代性が向上し ($F(1, 44)=4.68, p<.05, \eta^2=.30$)，若者のニュートラル

反応によって有意に世代性が低下しており ($F(1, 44)=4.08, p<.05, \eta^2=.27$)，成功経験からの知恵の“語り”の場合は若者の反応の影響は認められなかったため，仮説は支持された (Figure1)。



(Figure1) The mean scores of generativity scale (pre- and post-narrative) in Experience of Failure group.

まず，高齢者が失敗経験からの知恵を継承する場面において，若者がポジティブに反応すると高齢者の世代性が向上し，ニュートラルに反応すると世代性は低下するという結果から，失敗経験からの知恵を継承する場合は若者からの反応の影響を受けやすいという仮説は支持された。先行研究では，若者は高齢者の成功経験から得られた知恵よりも，自らが将来的にリスクを回避することのできる，高齢者の失敗経験から得られた知恵をより求めていることが報告されている(田淵・三浦, 2014)が，本研究の結果は，そうした失敗経験から得られた知恵を継承する場合の方が，成功経験から得られた知恵を継承する場合よりも，高齢者の短期的な心理的变化に対する若者の反応の影響が強く，若者の反応が高齢者の世代性にとってポジティブ・ネガティブ双方の影響を与えうる可能性を示している。自らのネガティブな経験を自分たちよりも若い世代に開示することで，次世代にネガティブな経験を回避させる行動

は、「世代間緩衝」(Kotre, 1984;Kotre & Kotre, 1998)行動のひとつであり,次世代に対する利他性をより多く含んだ行動であると考えられる。高齢期は自己の死を意識するため,次世代に対する利他性が向上することが先行研究(Maxfield, Greenberg, Pyszczynski, Weise, Kosloff, Soenke, Abeyta, & Blatter, 2014)で報告されているが,そうした次世代に対する利他的な行動場面では,受け手である若者との世代間相互作用のありようが高齢者の心理発達にとってより重要な意味を持つことを,本研究により示すことができた。

引用文献

Cheng, S. T. (2009). Generativity in later life: Perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being. *Journal of Gerontology*, 64B, 45-54.

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. (仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会 みすず書房)

Kotre, J., & Kotre, K. B. (1998). Intergenerational Buffers: "The damage stops here". In McAdams, D. P. & Aubibn, E. S. (Eds.), *Generativity and Adult Development*. Washington, D. C.: American Psychological Association.

丸島令子・有光興記 (2007). 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討, *心理学研究* 78, 303-309.

Maxfield M, Greenberg J, Pyszczynski T, Weise DR, Kosloff S, Soenke M, Abeyta AA, & Blatter J. (2014). Increases in generative concern among older adults following reminders of mortality. *International Journal of Aging and Human Development*, 79, 1-21.

McAdams, D. P., & Aubin, E. S. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015.

小澤義雄 (2013). 老年期における世代間継承の認識を伴う自己物語の構造. *発達心理学研究* 24, 183-192.

田淵恵・上有谷もえこ・成田健一・三浦麻子 (2014). 世代間コミュニケーション場面

での感謝生起と制御適合 *電子情報通信学会技術研究報告書*, 113, 95-99.

田淵恵・三浦麻子 (2014). 高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討 *心理学研究*, 84, 632-638.

田淵恵・三浦麻子 (2014). 高齢者の利他的行動としての「語り」に与える世代間相互作用の影響——実験場面を用いた検討—— *発達心理学研究*, 25, 251-259.

Tabuchi, M., Nakagawa, T., Miura, A., & Gondo, Y. (2013). Generativity and Interaction between the Old and Young: The Role of Perceived Respect and Perceived Reject. *Gerontologist*. Online first.

田淵恵・中川威・権藤恭之・小森昌彦 (2012). 高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 *厚生指標*, 59, 1-7.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Megumi Tabuchi, & Asako Miura (in press). Young people's reactions change elderly people's generativity and narratives: The effect of intergenerational interaction on the elderly. *Journal of Intergenerational Relationships*. 査読有

田淵恵・三浦麻子 (2014). 高齢者の利他的行動としての「語り」に与える世代間相互作用の影響: 実験場面を用いた検討. *発達心理学研究*, 25(3), 251-259. 査読有

Megumi Tabuchi, Takeshi Nakagawa, Asako Miura, & Yasuyuki Gondo. (in press). Generativity and Interaction between the Old and Young: The Role of Perceived Respect and Perceived Reject. *The Gerontologist*. 査読有

田淵恵・三浦麻子 (2014). 高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討 *心理学研究*, 84(6), 632-638. 査読有

[学会発表](計 4 件)

田淵恵・三浦麻子 世代間コミュニケーションにおける感謝生起と制御適合 (第55回日本社会心理学会大会 北海道大学, 北海道 2014年7月26日)

田淵恵・三浦麻子 高齢者の利他的行動
場面における世代間相互作用の実験的検討
(第 54 回日本社会心理学会大会 沖縄国際大
学, 沖縄 2013 年 11 月 2 日)

Megumi Tabuchi, Asako Miura The
Effects of Reactions from Younger Generations
on the Elderly. (American Psychological
Association Annual Convention. Hawai'i,
America August 1, 2013)

Megumi Tabuchi, Takeshi Nakagawa,
Yasuyuki Gondo The Causal Association
between Generative Concern and Generative
Acts. (International Association of Gerontology
and Geriatrics 20rd World Congress. Seoul,
Korea June 25, 2013)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/tabuchimegumi/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

田淵 恵 (TABUCHI, Megumi)

関西学院大学・文学研究科・博士研究員

研究者番号：70631977

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：